

優秀賞

日本語教育から紡ぐ未来

東海高等学校 3年 中村 亮太

「日本語は学ぶ必要ない」ブラジル人学校を訪問した際にとある生徒がそう言った。外国人に対する日本の冷たさを暗示された気がして、寂しくそして悔しくなった。

僕がいる愛知県には、28万人の外国人が住んでおり、それは東京都に次いで2番目に多い。その中でもブラジル人の数は全国で一番多く、日本のブラジル人人口の約30%を占めている。しかし、そんな身近に在日外国人問題を感じられる環境に身を置いているにもかかわらず日々は過ぎてしまう。学費が払えない外国人留学生や、日本語が読めず行政の手続きに苦勞する外国人労働者をニュースで目にしても、同情や不快感を抱きながらも、その問題に真剣に向き合うことはなかった。ただ、高校2年生の時にしたアメリカ留学で、そんな僕の視点は大きく変わった。ヒスパニック系と白人が約80%を占めるテキサスで、たった5%しか占めないアジア系マイノリティとして過ごした1年間は、僕の意識を一転するのには十分な期間だった。帰国して数週間後のある日、テレビをつけると在日外国人問題のニュースが流れていた。保険トラブルを抱えるブラジル人の留学生の姿が、アメリカで泣きながら母に電話した自分に重なって見えた。いてもたってもいられなくなりインターネットを開くと、「外国籍児童1万人が不就学」という記事が目にとまった。登校するのが当たり前だと思っていた小学校や中学校に通っていない子どもがいることが衝撃だった。すぐに日本語教室のボランティアに応募した。放っておいてはいけない気がしたからだ。すると後日、ボランティア団体に所属しているブラジル人学校の講師の方から、一緒にブラジル人学校に行かないかと誘われた。はい、二つ返事で返した。

想像している学校とは違うよ、と言われ身を構えていたが、学校を

見ると言葉を失った。学校は、いわゆる学校の建物ではなく、古くなったアパートを丸々使っていたのだ。アパートの部屋を教室として使い、閉まりきらない扉からはギコギコと音が鳴っていた。冷房の効かない部屋で窮屈に授業を受けている生徒や、明らかに教師の数が足りていない現状を見て、ようやく外国人問題の表層に触れた気がした。自分と同じ年齢の生徒が過酷な環境で勉強をしていること、そしてそれが日本で起きていることに衝撃を受けた。真正面から向き合うべき問題だ、そんなことを言われた気がした。そして、何度も訪問や会話を重ねるうちに、そこに通う生徒と仲良くなり他愛もないことを話すようになった。ある時、ふとしたタイミングで家庭の話になった。僕には兄弟がいることを話すと、世話を見る必要がある小さな妹がいること、両親が共働きだから学校が終わると家に帰りご飯を作らないとならないこと、そして、妹は小学校に通っているがうまく馴染めず悩んでいることを彼は明かしてくれた。なんで馴染めないの、そう尋ねると、「日本語が話せないから。ただ仕方ないよね。日本語が話せるようになって日本では働きたくないし、学ぶ必要ないから。」彼は流暢な日本語でそう答えた。

日本に住む外国人は約307万人。全人口の約2.2%を占める。これは決して無視できる数字ではない。日本に住んでいることが原因で学校がなくなる子どもや、日本の現状に諦めの感情を抱く若者がいる。この問題は、日本語教育をすれば済む話ではなく、社会全体の意識や構造から変えなくてはならない。僕は今、日本語教室ボランティアを通じて、日本人ボランティア向けに外国人生徒に対する接し方をまとめたビデオを作ったり、在日外国人の生徒向けの日本語教材作成やキャリア相談に取り組んだりしている。短期間で結果につながる活動ではないが、いつか「日本語を学んでよかった」と言ってくれる子どもが増えるために、この活動を続けていく。